はるか

ゆたかな暮らしの情報紙

令和4年冬号

「ありがとう」を花せるお葬式
東京　千葉　埼玉　神奈川
孝行舎　株式会社 孝行舎
―お見積り無料　ご相談随時受付―
本　　社：東京都足立区中央本町4－17－2
葬儀サロン：東京都足立区中央本町1－19－2
フリーダイヤル 0120-81-5548
TEL 03-3887-9090(代) FAX 03-3887-9091
孝行舎　検索
深夜・早朝でもご遠慮なくお電話下さい
24時間・365日寝台車がお迎えにまいります

○すこやか「食」の旅――七味唐辛子
○ご存じですか？――「小泉八雲」
○伝統のモノ――招き猫
○花ものがたり――パンジー
○生活の中の仏教語――行儀
○仏事と葬儀の知識――通夜の意味としきたり

すこやか「食」の旅

七味唐辛子

「七味唐辛子」は、山葵などと共に和食の味の引き立て役として欠かせない、日本ならではの〝ミックススパイス〟です。

まず、七味唐辛子の基本材料である唐辛子は、どのような経路で日本にもたらされたのでしょうか。その名称から、唐辛子は唐の国（中国）から伝わったと考えてしまいそうですが、どうもそうではないようです。

◆唐辛子とコロンブス

一説に、約9000年前から中南米に自生していたナス科の植物・唐辛子は、イタリア生まれの航海者・コロンブスの〝誤解〟によって世界に広まったといわれています。

ジパング（日本）の黄金とインドの胡椒（※当時、胡椒は金と同じ価値があるといわれるほど貴重なものでした）を目的に航海に出たコロンブスは、西インド諸島で赤くて辛味のある小粒の実（唐辛子）に出合い、その実を胡椒の一種だと勘違いしてヨーロッパに持ち帰ります。

その後、栽培しやすい唐辛子の種子は、大航海時代のポルトガル船などによってアフリカやインド、東南アジアに持ち込まれ、世界の食文化に影響を与えることになるのです。日本での唐辛子の異名「南蛮」あるいは「南蛮辛子」も、ポルトガル船（南蛮船）が唐辛子を長崎に伝えたという説を裏づけるものかもしれません。

◆七味唐辛子の誕生

栽培が楽で薬効もある唐辛子の評判は日本でも上々で、寛永2年（1625）、漢方医や薬問屋の多い日本橋薬研堀で売り出されたのが、その唐辛子をベースにした「七味唐辛子」でした。消化を促進する唐辛子に加え、強壮効果のある胡麻や整腸作用のある山椒、風邪を防ぐ陳皮（みかんの皮を干したもの）など、7種類の材料を配合した七味唐辛子は、時を同じくして流行り始めた蕎麦の薬味としても人気が高まり、張り子の唐辛子を肩から提げて市中を売り歩く〝七味唐辛子売り〟も現れたといいます。

自家製七味唐辛子の作り方

「七味」とはいっても、7種類の材料を用いる必要はありません。いろいろ試しながら、自家製ならではの味をみつけてください。

〈A〉次の材料から幾つかを選んで用意します。
①一味唐辛子　②生姜　③みかんの皮　④青じそ　⑤粉山椒　⑥胡麻　⑦青のり　⑧芥子の実　⑨麻の実

〈B〉②（スライスする）・③・④はカラカラになるまで天日に干し、すり鉢でするか、ミキサーにかけて細かくします。⑥・⑦・⑧・⑨はフライパンで乾煎りして香りを出します。

〈C〉味をみながら配合を調整し、お好みの味にします。

ご存じですか？ 小泉八雲

私たちは、歴史上の人物など一般によく知られている人について「きっとこういう人だったのだ」などと、思い込んでしまっている場合があります。しかし、ときには「こんな意外な面もあったのか」と驚いたり、「私たちとあまり変わらないじゃないか」と、その暮らしぶりに親しみを覚えたりすることもあります。

＊　＊

今回は、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）についての話題をご紹介しましょう。

■〝流転〟の人生

イギリス軍の軍医だったアイルランド人の父とギリシャ人の母のもと、父親が駐屯していたギリシャの島で生まれたラフカディオ・ハーン（1850～1904）が「小泉八雲」を名乗るようになったのは、イギリス国籍を捨てて日本に帰化した1896年（明治29年）のことです。

幼くして母親と生き別れ、父親との縁も薄く、帰るべき故郷をもたなかった八雲の〝さすらい〟の生涯は、ギリシャを経てアイルランドやロンドンに移り住んだヨーロッパ時代、19歳で渡米してからのアメリカ時代、そして、40歳を目前に来日し、54歳で亡くなるまでの日本時代と、大きく3つに分けられます。

しかし、1890年、太平洋航路で横浜を目指した当初は、日本に長期滞在する予定はなく、まして日本に帰化してその地で生を終えることになるなど、八雲本人も考えもしなかったに違いありません。

■「書く人になる」

生まれてこのかた、一つの国一つの都市に留まることなく、さまざまな文化を体験した八雲は、アメリカ時代から「書く人になる」という目標をもち、新聞記者として、作家として、自分が見聞した異文化を伝えるためにペンをふるいます。やがて、八雲の記事や著作は読者の評判を呼び、雑誌社の依頼で挿絵画家を伴って来日したのも、明治維新後の新しい日本を紹介する記事を書くためでした。

■〝神々の国〟日本へ

八雲が日本行きを引き受けた理由の一つとして、1884年にアメリカ・ニューオーリンズで開催された万国博覧会を取材した際、日本の工芸や文化のすばらしさに感動したことが挙げられます。また別に、英訳された『古事記』を読み、〝複数の神々のおわす〟日本に対し、ギリシャ神話との共通項を見出して興味を深めていたともいわれます。

そして、いざ来日し、当初の予定より長逗留をして日本のことを理解したいと思うようになった八雲は、依頼主の雑誌社と決別。このことが結果的に八雲を日本に留め、後の、私たちの知る「小泉八雲」を誕生させることになるのです。

アメリカからの収入が途絶えた八雲は、日本での生活を維持するために英語教師となり、日本で初めて職に就いたのが出雲の城下町・松江の尋常中学校および師範学校でした。また、妻となる小泉セツと出会ったのもこの地でした。

■八雲の功績

来日以前、アメリカですでに作家として知られていた八雲ですが、これ以降、日本文化を伝える随筆や、『耳なし芳一』など〈再話文学〉（※昔からの物語や伝説・民話などをベースに新たに書かれた作品）と称される多くの物語を書き、それら八雲の作品は、欧米の人びとが日本を知るきっかけにもなりました。

たとえば、1922年（大正11年）に来日した物理学者アルベルト・アインシュタインは、八雲の作品などで読んだ美しい日本の姿を、実際に自分の眼で確かめたくて日本を訪れたと語ったそうです。

因みに、八雲は外国語の習得が得意だったにもかかわらず、日本語の読み書きは苦手だったようです。ですから日本でもすべての作品を英語で書き、一般の日本人が彼の作品を日本語で読めるようになったのは、アインシュタイン（が英語で読んだ）よりも遅く、1926年（昭和元年）以降のことでした。

伝統のモノ―福を招く縁起物

招き猫

猫は昔から、私たち人間にはない神秘性や不思議な力をもっていると考えられ、猫にまつわるさまざまな迷信が日本各地にも伝えられています。

今回ご紹介する「招き猫」も、そのような土壌から生まれたものかもしれません。

異説の多い由来

「招き猫」の由来については、中国の古い文献に「猫が顔を洗う手が耳を過ぎれば客が来る」ということわざが記されているそうで、日本にも「猫が顔を洗えば客が来る」といった言い伝えが残る地域もあるようです。

確かに、猫が顔を洗う（顔を撫でてきれいにする）動作は、招き猫のポーズそのままで、その伝承を〝形〟にしたのが「招き猫」だと想像できなくもありません。他にも、太田道灌が戦で黒猫に導かれて難を逃れた話など、招き猫のルーツについてはさまざまな説があります。

招き猫の寺

なかでも、猫の報恩招福のお陰で栄えるようなり、今も〝招き猫の寺〟として知られるお寺が東京にあります。

江戸時代、万治年間（1658～1661）のこと。彦根藩井伊家の所領であった武蔵野国世田谷（現・東京都世田谷区）の弘徳院（現・豪徳寺）に、鷹狩りの帰りらしき藩主・井伊直孝の一行が立ち寄ります。豪徳寺の縁起によれば、そのとき直孝は「この寺の前を通ったところ、門前の猫がしきりに手招きをする。あまりに不思議なので訪ね入った。しばらく休ませてもらいたい」と言い、ほどなくして雷雨となった中、お茶の接待を受けながら和尚さまの法話に耳を傾け、仏道への帰依の心を深めたといいます。このことがきっかけで、この寺は井伊家の菩提寺となり、豊かに栄えるようになったということです。

因みに、門前で直孝一行に手招きしたという白猫は、貧しい寺であった弘徳院の和尚さまが自分の食事を割いてまで与えて可愛がっていた猫で、「恩義を知るなら、何か果報を招いておくれ」と言う和尚さんに応えて、藩主一行を手招いたといわれています。

幕末のお江戸で大流行

「東海道五十三次」などで知られる江戸後期の浮世絵師・初代歌川（安藤）広重が、1852年（嘉永5年）に描いた「浄瑠璃町繁花の図」でも、露天商の屋台に並べて売られる「招き猫」を見ることができます。豊かになりたいという庶民の願望とあいまって、こんな光景からも、お江戸の「招き猫」人気が伝わってきます。

「右手上げ」と「左手上げ」

ところで、郷土色豊かな日本各地の「招き猫」を見ると、上げているのは右手、左手、さまざまです。一般に、「右手」は金運、つまり〝お金〟を、「左手」は人、つまり〝お客さん〟を招くといわれています。しかし、今はお金万能の世の中になってしまっているのか、右手上げのほうが圧倒的に売れ行きがよいそうです。

★ ご存じですか？ ★

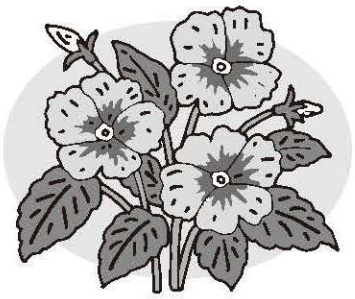
「招き猫」は海外でも!?

「招き猫」は日本独自の縁起物ですが、昨今では海外で目にすることもあるといいます。中には日本製もあるそうですが、幸運を招くラッキー・キャットとして、現地で作られているものもあるようです。

花ものがたり

「パンジー」

ヨーロッパ原産の「パンジー」は、和名を「三色菫（サンシキスミレ）」といい、この三色とは、パンジーの原種である紫・黄・白の3色を意味します。



「パンジー」はヨーロッパでは、17世紀頃から栽培されていたといわれますが、イギリスやフランスで本格的に品種改良を始めたのは、19世紀になってからです。

日本には幕末にオランダからもたらされ、「遊蝶花」や「人面草」と呼ばれて親しまれました。日本で品種改良を始めたのは近年のことで、いまでは優良品種が育成され、逆に種子を海外に輸出するまでになっています。

「パンジー」の語源は仏語の「パンセ」で、（考える、思う）を意味する動詞「パンセ（penser）」に由来します。理由は、この花が物思いにふける人間の顔を連想させるからだといわれ、花言葉もそこからきています。

因みに、シェークスピアの『ハムレット』にも「パンジーがあるわ。これは物思いに」というオフィーリアのセリフが出てきます。

＊花言葉……「考え」「思い」など。

生活の中の仏教語

行儀

「お宅のお子さんはいつもお行儀がいいですねえ」と感心したり、「まったく行儀がなってないじゃないか！」と憤ったり…。このように日常おいて使われる「行儀」は、（作法に適うかどうかという点から見た）立ち居ふるまいのことをいいます。また、「何だかこのところ他人行儀じゃないか。どうかしたのかい？」などと言う場合の「行儀」は、行いそのものを意味します。

一方、仏教でいう「行儀」とは本来、「行（ゆく）・住（とまる）・坐（すわる）・臥（ねる）」といった修行における行為の規則、または行事の儀礼や作法を表す言葉です。

昔は「嫁入り前の娘さんが〝行儀見習い〟のために奉公に出る」などということもあったようです。その目的は、お客さまへのお茶の出し方や雑巾がけに至るまで、おおよそ家庭を営むに必要な礼儀や作法を身につけることでした。

いまなら時代錯誤も甚だしいと糾弾されてしまいそうですが、時代は変わっても「行儀」の基本は忘れないでおきたいものです。

仏事と葬儀の知識

通夜の意味としきたり

「通夜」とは、故人の霊を慰め、故人と共に最後の一夜を過ごす儀式で、もともとは遺族や近親者、親しい友人など、故人と縁の深い人たちだけで行うものでした。しかし近年では、仕事などの都合で昼間の葬儀・告別式に参列できない人のために、通夜から受付を設け、弔問客に対応するようになっています。

故人を偲んで喪に服し、弔問客に礼を尽くすという意味からも、喪主や遺族・親族は正式喪服を着用するのがしきたりですが、弔問する側は、訃報に接してとりあえずということからも、略式喪服のほうがむしろ礼に適っていると言えます。席次は、祭壇に向かって右側に喪主・遺族、近親者など、左側には友人、知人、仕事関係者などが座り、祭壇正面後方が一般弔問客の席になります。また、喪主や遺族は、弔問客を迎えたり見送ったりするために席を立つことはしません。

なお、通夜のあとの通夜ぶるまいは、故人から参列者へのふるまいという意味も込められていますので、断らずに受けるのが礼儀です。

※通夜のしきたりは地域により異なる場合もあります。